

## 「最期を迎えられる病院」

岩手県立軽米病院 院長 横島 孝雄

在宅医療が叫ばれ、自宅の畳の上で最期を迎えることが理想(?)とされる風潮があるが実際はそうもいかない。若い人のほとんどが日中働きに出ており、介護する配偶者も高齢で体調不良のことも多く、人生の終末期を迎えている高齢者を自宅で介護する体制ができる家庭は限られる。また、医師不足の地域では在宅医療に手が回らず、自宅での看取りができていく現状もある。介護施設で最期を迎えることも徐々に増えつつあるが、まだ多くはない。

必然的に、調子が悪くなったら病院に入院し、そこで最期を迎えることが多いのが当地域の現状であろう。

それではどういう病院で最期を迎えるのがいいのだろうか。

沿岸の知人の働いている病院は海沿いの高台にあり、目の前に海が広がり、海から朝日が昇る。船乗りをしていた終末期の患者が窓から海をじっと見ていたそうである。海で働いた人が人生を終えるには最高だと知人は話していた。以前働いた日本海側の病院では、海に沈む夕日で廊下が真っ赤に染まって思わず息をのんだ。こういう病院で最期を迎えるのも悪くないと思った。

海はなくても、遠くに山並みが見え、木々や草花で季節の移ろいを感じられる病院でゆっくりと人生を終えるのもいいと思う。

このような環境面だけでなく、終末期医療には時間的余裕も必要と思われる。

世の中は余裕がなくなり、医療もまたなんとなくギスギスしてきたように思われる。地域の基幹病院では、入院すると病状にかかわらず退院調整が始まる。病気によってはクリニカルパスに沿ってベルトコンベア式に専門的な医療が進み、自動的に退院することになる。多くの基幹病院で地域包括ケア病棟が立ち上がり、以前よりは時間的に余裕ができたとはいえ、専門的な医療で手一杯の基幹病院で高齢者がゆっくりと最期を迎えるのは現実的には難しい。

そこを支えるのが中小病院だと思われる。自宅や施設に帰れない終末期の患者さんを引き受け、患者や家族の希望を確認しながら慢性期病棟を活用して診ていくのである。当院の場合、食事が食べられなくなったが、経管栄養は希望されない患者さんが増えている。この場合、療養病床で最小限の補液を行い、可能な範囲の経口摂取で経過をみていく。多くは看取りになるが、食べられるようになり補液がいらなくなる場合もある。

超高齢社会となり、終末期を迎える患者さんも多く、ゆっくりと最期を迎えられる病院の重要性がますます大きくなってきていると思われる。